

# 西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文解読記

伊 藤 義 教

## I ま え が き

1964年6月3日、京都大学文学部考古学教室樋口隆康助教授から写真一葉を示され、その文を解読してほしいと申し入れられた。北京市王府大街九号、中国科学院考古研究所の夏鼐博士が、筆者を指名されてではないが、同助教授に書状をもって依頼されたものであった。その書状によると、写真は西安出土漢蕃合璧墓誌の蕃文面で、漢文面の方には

左神策軍散兵馬使蘇諒妻馬氏

咸通十五年甲午卒年廿六等

とある旨がしたためられていた。樋口助教授のおはなしでは、先方は非常に急いでおられるので一日でも早い方がよいとのことで、二週間を一応の期間として提示された。蕃文というのはパフラヴィー走行体 (Pahlavi cursive)——さらに限定すれば文籀パフラヴィー書体 (Bookpahlavi)——で、6行にわたってしたためられた中期ペルシア語 (パフラヴィー語) であるが、鏤刻が浅く岩面の損傷も相当にあつて読みとりにくい個所が非常に多く、また与えられた漢文というのが上記したように「……等」とあつて相当省略されていることが容易にうかがわれ、漢蕃両文を対照させて解読するには欠けるところが多かつた。それでも翌6月4日には一応の解読を終え、樋口助教授にその内容をお伝えしたところ、同助教授からは直ちに夏博士に通報されるとともに漢蕃合璧の完全な写真を送付してほしい旨を申し入れていただいた。と同時に、解読について小論を至急草するようとの助教授のご懇願にて、6月15日「西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文試解読え書」と題する小簡を同助教授に提出した。この小簡をどのように取扱うかで種々ご配慮を煩わしたが、結局このまま中国に送付して中国語訳してもらい、それをもう一度送り返してもらつて中日両文を対照検討してみることになった。こうしたあいだに、樋口助教授は京都大学第5次イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊に参加、近くアフガニスタンに出発されることとなつたので、夏博士に、以後は直接筆者と交渉をほしい旨申し入れられ、7月8日羽田空港を出発された。こういういきさつがあつて待つうちに、夏博士から7月22日付の書簡が漢蕃合璧墓誌の写真一葉をも同封して8月2日にとどき、つづいて上記「西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文試解読え書」(以下「覚え書」と略称)の



説明

(左) 夏博士から贈られた西安出土漢蕃合璧墓誌の写真。

(下) 同上墓誌蕃文を筆者が見写したものの。不明(刻面)部分は点線で示した。これをさらにわかりやすく筆写するとともに筆者による校定と漢文面とを併せて示したものは次ページにある。

Handwritten transcription of the Sogdian text from the tomb inscription fragment, showing several lines of script in a cursive style.

中国語訳が「西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文試解札記」(以下「札記」と略称)と題して8月14日にとどいた。そしてこの「札記」には夏博士の註記が二、三付せられていた。順序立ったものではないが、ここではそれを整理要約して仮りに番号を付し、あとから言及する際の参考に便せしめたい。

「札記」註(1) この墓誌は1955年冬、西安市で発見され、現在は陝西省文物保管委員会に管理

されている。漢文面は7行44字。発見の経過は『考古』（北京出版）1964年9期を参照せよ、とのこと。（同書 p. 458 及び図版9, 1 参照——この項追記）

(2) 蕃文中の Sizinsay を、夏博士は唐代陝州にあった禁軍、左神策軍の音訳と解された。

(3) 漢文面については前記『考古』の附録（pp. 458—461——この項追記）に考証が載っている旨報じられるとともに、「札記」にこう註された：“唐の徳宗の貞元3年（787 A. D.），宰相李泌は長安（西安）在留の胡客約4000人を全部神策軍に隷入させたが、蘇諒というのはこの胡客の後裔で、本国から新たに来たものではない。『資治通鑑』巻232，貞元3年の項に「胡客無一人願歸國者，必皆分隸神策兩軍，王子使者爲散兵馬使或押牙，餘皆爲卒。」とある。蕃文は蘇諒が王族たることを示しているのだから、かれの軍職が散兵馬使である点とよく符合する。”

(4) 紀年の問題にも夏博士は一つの考え方を提唱されたが、これについては後段 p. 25 で触れることとした。

とにかく、これで本格的な解読に取りかかるお膳立てはととのったわけである。そうした結果、筆者によって解読、按読、乃至再構設定された蕃文テキストを墓誌面にならってかかげ、さらに漢文面をも墓誌面に従って示すと下のとおりでである。このテキストは普通の筆写体になおしたもので、肉太の下線を施したものは筆者による改訂、〔 〕は同じく推定的再構を示す。右端の数字も筆者が行数を示すために付したものである。

1 𐰀𐰃𐰆𐰇𐰈𐰉𐰊𐰋𐰌𐰍𐰎𐰏𐰐𐰑𐰒𐰓𐰔𐰕𐰖𐰗𐰘𐰙𐰚𐰛𐰜𐰝𐰞𐰟𐰠𐰡𐰢𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿𐱀𐱁𐱂𐱃𐱄𐱅𐱆𐱇𐱈𐱉𐱊𐱋𐱌𐱍𐱎𐱏𐱐𐱑𐱒𐱓𐱔𐱕𐱖𐱗𐱘𐱙𐱚𐱛𐱜𐱝𐱞𐱟𐱠𐱡𐱢𐱣𐱤𐱥𐱦𐱧𐱨𐱩𐱪𐱫𐱬𐱭𐱮𐱯𐱰𐱱𐱲𐱳𐱴𐱵𐱶𐱷𐱸𐱹𐱺𐱻𐱼𐱽𐱾𐱿𐲀𐲁𐲂𐲃𐲄𐲅𐲆𐲇𐲈𐲉𐲊𐲋𐲌𐲍𐲎𐲏𐲐𐲑𐲒𐲓𐲔𐲕𐲖𐲗𐲘𐲙𐲚𐲛𐲜𐲝𐲞𐲟𐲠𐲡𐲢𐲣𐲤𐲥𐲦𐲧𐲨𐲩𐲪𐲫𐲬𐲭𐲮𐲯𐲰𐲱𐲲𐲳𐲴𐲵𐲶𐲷𐲸𐲹𐲺𐲻𐲼𐲽𐲾𐲿𐳀𐳁𐳂𐳃𐳄𐳅𐳆𐳇𐳈𐳉𐳊𐳋𐳌𐳍𐳎𐳏𐳐𐳑𐳒𐳓𐳔𐳕𐳖𐳗𐳘𐳙𐳚𐳛𐳜𐳝𐳞𐳟𐳠𐳡𐳢𐳣𐳤𐳥𐳦𐳧𐳨𐳩𐳪𐳫𐳬𐳭𐳮𐳯𐳰𐳱𐳲𐳳𐳴𐳵𐳶𐳷𐳸𐳹𐳺𐳻𐳼𐳽𐳾𐳿𐴀𐴁𐴂𐴃𐴄𐴅𐴆𐴇𐴈𐴉𐴊𐴋𐴌𐴍𐴎𐴏𐴐𐴑𐴒𐴓𐴔𐴕𐴖𐴗𐴘𐴙𐴚𐴛𐴜𐴝𐴞𐴟𐴠𐴡𐴢𐴣𐴤𐴥𐴦𐴧𐴨𐴩𐴪𐴫𐴬𐴭𐴮𐴯𐴰𐴱𐴲𐴳𐴴𐴵𐴶𐴷𐴸𐴹𐴺𐴻𐴼𐴽𐴾𐴿𐵀𐵁𐵂𐵃𐵄𐵅𐵆𐵇𐵈𐵉𐵊𐵋𐵌𐵍𐵎𐵏𐵐𐵑𐵒𐵓𐵔𐵕𐵖𐵗𐵘𐵙𐵚𐵛𐵜𐵝𐵞𐵟𐵠𐵡𐵢𐵣𐵤𐵥𐵦𐵧𐵨𐵩𐵪𐵫𐵬𐵭𐵮𐵯𐵰𐵱𐵲𐵳𐵴𐵵𐵶𐵷𐵸𐵹𐵺𐵻𐵼𐵽𐵾𐵿𐶀𐶁𐶂𐶃𐶄𐶅𐶆𐶇𐶈𐶉𐶊𐶋𐶌𐶍𐶎𐶏𐶐𐶑𐶒𐶓𐶔𐶕𐶖𐶗𐶘𐶙𐶚𐶛𐶜𐶝𐶞𐶟𐶠𐶡𐶢𐶣𐶤𐶥𐶦𐶧𐶨𐶩𐶪𐶫𐶬𐶭𐶮𐶯𐶰𐶱𐶲𐶳𐶴𐶵𐶶𐶷𐶸𐶹𐶺𐶻𐶼𐶽𐶾𐶿𐷀𐷁𐷂𐷃𐷄𐷅𐷆𐷇𐷈𐷉𐷊𐷋𐷌𐷍𐷎𐷏𐷐𐷑𐷒𐷓𐷔𐷕𐷖𐷗𐷘𐷙𐷚𐷛𐷜𐷝𐷞𐷟𐷠𐷡𐷢𐷣𐷤𐷥𐷦𐷧𐷨𐷩𐷪𐷫𐷬𐷭𐷮𐷯𐷰𐷱𐷲𐷳𐷴𐷵𐷶𐷷𐷸𐷹𐷺𐷻𐷼𐷽𐷾𐷿𐸀𐸁𐸂𐸃𐸄𐸅𐸆𐸇𐸈𐸉𐸊𐸋𐸌𐸍𐸎𐸏𐸐𐸑𐸒𐸓𐸔𐸕𐸖𐸗𐸘𐸙𐸚𐸛𐸜𐸝𐸞𐸟𐸠𐸡𐸢𐸣𐸤𐸥𐸦𐸧𐸨𐸩𐸪𐸫𐸬𐸭𐸮𐸯𐸰𐸱𐸲𐸳𐸴𐸵𐸶𐸷𐸸𐸹𐸺𐸻𐸼𐸽𐸾𐸿𐹀𐹁𐹂𐹃𐹄𐹅𐹆𐹇𐹈𐹉𐹊𐹋𐹌𐹍𐹎𐹏𐹐𐹑𐹒𐹓𐹔𐹕𐹖𐹗𐹘𐹙𐹚𐹛𐹜𐹝𐹞𐹟𐹠𐹡𐹢𐹣𐹤𐹥𐹦𐹧𐹨𐹩𐹪𐹫𐹬𐹭𐹮𐹯𐹰𐹱𐹲𐹳𐹴𐹵𐹶𐹷𐹸𐹹𐹺𐹻𐹼𐹽𐹾𐹿𐺀𐺁𐺂𐺃𐺄𐺅𐺆𐺇𐺈𐺉𐺊𐺋𐺌𐺍𐺎𐺏𐺐𐺑𐺒𐺓𐺔𐺕𐺖𐺗𐺘𐺙𐺚𐺛𐺜𐺝𐺞𐺟𐺠𐺡𐺢𐺣𐺤𐺥𐺦𐺧𐺨𐺩𐺪𐺫𐺬𐺭𐺮𐺯𐺰𐺱𐺲𐺳𐺴𐺵𐺶𐺷𐺸𐺹𐺺𐺻𐺼𐺽𐺾𐺿𐻀𐻁𐻂𐻃𐻄𐻅𐻆𐻇𐻈𐻉𐻊𐻋𐻌𐻍𐻎𐻏𐻐𐻑𐻒𐻓𐻔𐻕𐻖𐻗𐻘𐻙𐻚𐻛𐻜𐻝𐻞𐻟𐻠𐻡𐻢𐻣𐻤𐻥𐻦𐻧𐻨𐻩𐻪𐻫𐻬𐻭𐻮𐻯𐻰𐻱𐻲𐻳𐻴𐻵𐻶𐻷𐻸𐻹𐻺𐻻𐻼𐻽𐻾𐻿𐼀𐼁𐼂𐼃𐼄𐼅𐼆𐼇𐼈𐼉𐼊𐼋𐼌𐼍𐼎𐼏𐼐𐼑𐼒𐼓𐼔𐼕𐼖𐼗𐼘𐼙𐼚𐼛𐼜𐼝𐼞𐼟𐼠𐼡𐼢𐼣𐼤𐼥𐼦𐼧𐼨𐼩𐼪𐼫𐼬𐼭𐼮𐼯𐼰𐼱𐼲𐼳𐼴𐼵𐼶𐼷𐼸𐼹𐼺𐼻𐼼𐼽𐼾𐼿𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐾀𐾁𐾃𐾅𐾂𐾄𐾆𐾇𐾈𐾉𐾊𐾋𐾌𐾍𐾎𐾏𐾐𐾑𐾒𐾓𐾔𐾕𐾖𐾗𐾘𐾙𐾚𐾛𐾜𐾝𐾞𐾟𐾠𐾡𐾢𐾣𐾤𐾥𐾦𐾧𐾨𐾩𐾪𐾫𐾬𐾭𐾮𐾯𐾰𐾱𐾲𐾳𐾴𐾵𐾶𐾷𐾸𐾹𐾺𐾻𐾼𐾽𐾾𐾿𐿀𐿁𐿂𐿃𐿄𐿅𐿆𐿇𐿈𐿉𐿊𐿋𐿌𐿍𐿎𐿏𐿐𐿑𐿒𐿓𐿔𐿕𐿖𐿗𐿘𐿙𐿚𐿛𐿜𐿝𐿞𐿟𐿠𐿡𐿢𐿣𐿤𐿥𐿦𐿧𐿨𐿩𐿪𐿫𐿬𐿭𐿮𐿯𐿰𐿱𐿲𐿳𐿴𐿵𐿶𐿷𐿸𐿹𐿺𐿻𐿼𐿽𐿾𐿿𐾀𐾁𐾃𐾅𐾂𐾄𐾆𐾇𐾈𐾉𐾊𐾋𐾌𐾍𐾎𐾏𐾐𐾑𐾒𐾓𐾔𐾕𐾖𐾗𐾘𐾙𐾚𐾛𐾜𐾝𐾞𐾟𐾠𐾡𐾢𐾣𐾤𐾥𐾦𐾧𐾨𐾩𐾪𐾫𐾬𐾭𐾮𐾯𐾰𐾱𐾲𐾳𐾴𐾵𐾶𐾷𐾸𐾹𐾺𐾻𐾼𐾽𐾾𐾿𐿀𐿁𐿂𐿃𐿄𐿅𐿆𐿇𐿈𐿉𐿊𐿋𐿌𐿍𐿎𐿏𐿐𐿑𐿒𐿓𐿔𐿕𐿖𐿗𐿘𐿙𐿚𐿛𐿜𐿝𐿞𐿟𐿠𐿡𐿢𐿣𐿤𐿥𐿦𐿧𐿨𐿩𐿪𐿫𐿬𐿭𐿮𐿯𐿰𐿱𐿲𐿳𐿴𐿵𐿶𐿷𐿸𐿹𐿺𐿻𐿼𐿽𐿾𐿿

亡	廿	午	於	氏	馬	左
故	八	歲	咸	己	使	神
記	日	二	通	己	蘇	策
	丁	月	十	生	諒	軍
	巳	辛	五	年	妻	散
	申	卯	年	廿	馬	兵
	時	建	甲	六		
	身					

碑面はほぼ正方形で、漢蕃両文の位置などの詳細は写真を参照していただきたい。漢文面の左端には、漢文面の半分ぐらいのスペースが残っているが、この部分にははじめから何も鐫刻されていない。もし鐫刻されるならば、ここは当然、蕃文面の第5行の後半と第6行の全部が該当すべきところである上に、当該蕃文面が刻字不明で甚だよみにくいときているので、この空白は二重に惜しまれる。しかしそれはそれとして、「覚え書」では疑問として残されていたものが、新しい写真資料によって、新たに解決され、従ってそれに基づいて旧稿「覚え書」に削除、訂正、追加を加えることができた。この作業は8月中旬中に終わったが、「札記」の中国語（筆者には全く未知）を精読するのに日子を費やし、従ってこれへ削除、訂正、追加を朱書する作業がややひまどり、9月4日ようやく航空便で発送することができた。この改訂稿は「西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文の言語学的試解」（以下「試解」と略称）と題した。この「試解」には、蕃文を見写しその欠損不明部分を点線で再現したもの一葉と英文レジュメを付した。これらの送付に対し、受領の書簡（9月14日付）が夏博士から届いたが、そのなかにもう一つ同博士の見解が加えられていた。これを「試解」註(5)として、上の「札記」註(1)～(4)につづけて通し番号を付し、詳細は p. 23 で言及したい。（この「試解」は「……試釈」として『考古学報』、北京1964, No. 12 に訳載されることになった——この項追記）

## II 蕃文細説

まず p. 19 に示したテキストの子音転写と訓音転写をかかげ、それに訳文をつけてみよう。左端の数字は行数を示す。

- 1 ZNH w'spwhr 'nwšrwb'n m'syš y BRTH y 'nwšrwb'n
- 2 prtwmsp y syčn'sy y MN swryn ŠNT 200 W 40 y 'nwšrwb'n
- 3 yzdkrt W ŠNT 260 y tnyk'n ŠNT 15 y hm'y-pyrwčkr
- 4 hwt'y brč'wnd sn-twn W BYRH spndrmt W YWM spndrmt
- 5 pnm-yn BYRH pt' 26 wtyr'n YHWWNt 'Pš g's LWTH 'whrmzd
- 6 W 'māsrspnd'n [BYN] grwtm'n y p'hlwm 'hw'n YHWWNt ŠLM

- 1 'ēn vāspuhr anōšarvān Māsiš i 'duxt i anōšarvān
- 2 fratomasp i Sizinsay i 'hač Sūrēn 'sāl 200 ut 40 i anōšarvān
- 3 Yazdkart ut 'sāl 260 i tanikān 'sāl 15 i hamē-pērōžkar
- 4 χ<sup>v</sup>atāy varčāvand San-tōn ut 'māh Spandarmat ut 'rōč Spandarmat
- 5 jan-ma-ēn 'māh pat 26 vitirān 'būt 'ut-aš gāh 'apāk Ōhrmazd
- 6 ut Amāsraspandān [andar] garōdmān i pahlom aχ<sup>v</sup>ān 'būt 'drōt

つきにかかげる訳文中、〈 〉でかこんだ部分は筆者の加筆を示す。

これは('ēn), スーレーン家の出たる (i 'hač Sūrēn), 左神策〈軍〉の (i Sizin-say), 永霊者たる 〈一〉騎長 (anōšarvān fratomasp) の娘なる (i 'duxt i………), 王族の永霊者マーシーシュ (vāspuhr anōšarvān Māsīš) 〈である〉。永霊者ヤズドカルト〈三世〉の 240 年 ('sāl 200 ut 40 i anōšarvān Yazdkart) にして唐朝の 260 年 ('sāl 260 i tanikān), 威光赫々たる (varčāvand) 常勝の大王 (hamē-pērōžkar x'atāy) の咸通 15 年 ('sāl 15 …… San-tōn), そしてスパンドルマト月スパンドルマト日 (ut 'māh Sp. ut 'rōč Sp.) 〈すなわち〉建卯の月 (jan-ma-ēn 'māh) 〈に, かの女は年〉 26 で逝世者となった (pat 26 vitī-rān 'būt), そしてかの女の坐所は ('ut-aš gāh) 〈今や〉最勝界たるガロードマーン (garōdmān i pahlom ax'vān) において ([ 'andar]) オーフルマズドとアマスラスパンド諸神と偕ともにあることとなった ('apāk Ōhrm. ut Amāsr. …… 'būt)。〈かの女に〉平安 ('drōt) 〈あれ〉。

訳文中、3 箇所に出る“永霊者 (anōšarvān)”のかわりに、“今は亡き”, “故”とおきかえても、おそらくは誤りないものと思われるが、詳細はあとで述べる。以下はテキストを各行別に取り扱ってゆきたい。

1. 1. w. 1 ZNH='ēn の前に何か鐫刻されていた形跡は全くない。同じく女性に対する追悼碑でジョルジアのムスケタ (Mchet'a) のアラム・ギリシア二語併用文では、冒頭の書き出しで死者 (追悼される人物) が第 1 人称で

'anā Sārapit bart-i zī Zēvax

Σηραπειτις Ζηουάχου … θυγάτηρ …

わたしは Zēvax の娘 Sārapit です

と言い、そのあとでその人物が第 3 人称で記述されている。この形式はよく用いられるが、この形式を西安墓誌にあてはめれば ZNH を 'NH にかえるだけで事足りるけれども、今も述べたように碑面は Z (記号 Y) で始まって '(Ālef) で始まってはいないし、またパフラヴィー語では 'NH ('anā) でなく L (< LY=l-i “to me”) を用いて 'man “私” と訓じさせるので、ZNH は genuine なものであることがわかる。そうすると、'ēn “これ” で始まる形式は、イランのパールス地方で発見されているいく

つかの墓誌と同じものと見ねばならぬ。これらの墓誌に用いられている文字は、西安墓誌のものと同じくパフラヴィー走行体ではあるが、やや古くて前期のものに属する。その上、鐫刻もわるく読みにくいものが多いが、“これは何某のダクマク (ZNH dhmk y …… = 'ēn daχmak i ……)" という書き出しではじまっている点で、西安墓誌の先例といえる。そして、なかには

BYRH hwrđt y ŠNT 33 y yzđkrt' YWM wrhr'n

'māh Hōrđat i 'sāl 33 i Yazdkart 'rōč Varhrān

ヤズドカルトの33年のホールダト月、ワルフラーン日

と紀年の明瞭なものもある。この日付け 20, III, 33 A. Y. は 26, VIII, 664 A. D. である。これらの墓誌はいずれも上から下への縦書きとなっている。w. 2 : vāspuhr については 1. 2 : Sūrēn の項で言及することとし、w. 3 : anōšarvān についてみると、これは anōš “不死の” と ruvān “たましい” との合成詞 (anōš-ruvān とよんでよい) で、“不死なる霊をもつもの”、“永霊者”の意味。ところで、この語について興味のあるのは Bāgh i Lardī (パールの Istakhr と Sīvand との間にある Seidūn の近く) で発見された一刻文である。これは墓誌でないとしても追悼文とみられるもので、それには

Farruzāt i Dātvēh …… anōšruvān büt

ダートウェーフの子ファルクザートは永霊者となった

という句が見える。ここで“永霊者となった”とは“逝世者となった (vitirān büt)” (西安墓誌 1. 5) ということである。この追悼文は日付けはないが、上記のパールの墓誌よりはやや新しいものとみられる。anōšarvān をこのように“逝世者”の意味に解するなら、西安墓誌 1. 1, w. 3 や 1. 2 末語はたしかに同じ意味として理解することができる。しかしこの anōšarvān は人の生前にもこれを有しうるので 1. 1 末語が果して同義に解せられるかどうか——言葉をかえて言えば、逝世した女性の父なる (蕃文による) 人物がすでに故人となっていたかどうかは (もちろん、すでに故人となっていた可能性は大なるも)、この墓誌だけでは決定しにくいのである。ところで、その女性の名 (w. 4) であるが、部分的には彫りが浅くなって、全体としては読みとりにくい。頭音を示す M は w. 3 : anōšarvān につづけてしるされているし、それにつづく文字は判別至難である。おそらく '(Ālef) だろうと思われる。それにつづく字母もそんなに鮮明というほどではないが S と解せられるし、これに比すれば末字 Š はきわめて明瞭である。そしてこの Š は G /D/Y+ ' に分解せずに、š 音を示す Š とみるのが

無難である。そうすると、女性の蕃文名は子音転写で *m'syš*, 母音を打てば *Māsīš*, *Māsyāš* などとよむことができる。*ā* は *a* の長音または短音たりうることを示す。それらのうち1個を選ぶとすれば *Māsīš* であろうか。漢文面の馬氏己巳を馬氏己巳とみればこの女性の名字ではないかとの疑念もかんた。夏博士の「試解」註(5)というのは、漢文面は馬氏己巳で、その己巳は干支名であることを述べられたものであって、咸通15年(874 A. D.) 26歳で歿したとすれば彼の女は849 A. D. の生れであり、この849 A. D. は己巳歳であるから、漢文面は「蘇諒の妻馬氏—己巳の生れ—、年廿六」云々と解すべきであるというのである。結局、漢文面は *Mrs. M.* というふうに省略形で示しているわけであるから、蕃文名はそれ自身独自に決定するほかはない。筆者としては *Māsīš* にしても、そのほか上記した他の形にしても、これを他の文献に原ねることのできないのが難で、この点は後考に俟つこととしたい。*Mūš*, *Mūsā* などは短きにすぎる上に、前者は *Mūš parik* としてゾロアストラ教伝承に擯斥される妖星に通じるし、後者はモーセ(Hebr. *Mōšē*/Arab. *Mūsā*)としてこれまたゾ教神学がポレミクの対象として盛んに論難した人名を想起させて、共に不可である。しかしそれはともあれ、この女性は蕃文面にはっきりと、「スーレーン家出身者で左神策軍の騎長たる人の娘(‘duxt)」(ll. 1—2)といわれているのに、漢文面では「蘇諒の妻」となっていて、一見、くいちがいを見せている。

1. 2. その蘇諒は w. 6 に *Sūrēn* と出ている。*Sūrēn* といえば、アルシャク朝からサーサーン朝を通じて *Kārin*, *Mihrān* と並んだ三大豪族の一つと同じ名である。おそらく、そのスーレーン家と同じものと思われる。このスーレーン家に属する人物は *Sūrēn x*, *Sūrēn y* などとも呼ぶ。そうするとこの蕃文では“スーレーン家から出た”, “スーレーン家の一員たる”といった意味の *'hač Sūrēn* と出ているのみで、この人物の名はついに見えていないことになる。筆者が読んだ *fratomasp i Sizinsay* “左神策(軍)の騎長”のなかにこの人物の名をさぐろうとしても、成功率は少ない。*Sizinsay* すなわち *syčn'sy* は *spnnsy* その他でありうるが、散兵(馬使)の音写とみることもできず、人名とみることもできないし、*fratomasp* “騎長”はこれ以外に合理的な解読のしようがない。*asp* “馬”とか *uštr* “ラクダ”とかを後肢とする合成詞的人名はイランによく見うけるが、ここでは“散兵馬使”の訳語とみる方が合理的である。ただ、*fratomasp* すなわち *prtwmsp* の文字 *M* はやや異常で、右の *W* と左の *S* (パフラヴィー文字にて) と水平にならぶのが普通である(これについては p. 19 にか

かげた、筆者設定のテキストを参照のこと) のに、墓誌では S のやや右下に位置している。しかしこのように M 字をラインの下方に位置させることは 1. 3, w. 10 : hamē (hm'y)- にも似たところが見える。こうして蕃文では Sūrēn はたしかに家名として用いられ、そのスーレーン家のひとりで左神策軍の騎長だった人の娘がマーシーシュとなっているのに、漢文では Sūrēn すなわち蘇諒は人名として用いられ、その人の妻が馬氏となっている。こうした両版のズレはいろいろな解釈を許容する、例えば蕃文に言う騎長は Sūrēn A と名乗っていたし、漢文に言う蘇諒は Sūrēn B と名のっている、この Sūrēn A は女性の父で Sūrēn B は女性の夫であったとみることである。しかし A, B 共に同じ軍職ではあるし、これを別人とみるよりも、A=B とみる方が合理的である。つまり、父なる人が己が娘を妻としたのである。かかる最近親婚は ʔētōkdās とよばれて祆教（ゾロアストラ教）に功德行として勧奨するところであり、イランではハカーマニシュ王朝以来サーサーン王朝を通じて実際に長く行なわれてきた風習であった。漢文面の取りあげ方が妻と謳っているのは中国流の取扱い方であろう。そう言えば、上述したように、“蕃文 1. 5 の後半から 1. 6 全部にわたる重要な個所——祆教的信仰を告白した部分——が漢文面に対応句を全く有しない点も、中国流の扱いかたとみられる”（この項、吉川幸次郎教授の談）のである。この女性の父なる人がこのような豪族スーレーン家の一員であるから、かの女もまた vāspuhr “王族” (1. 1, w. 2) とよばれるわけである。夏博士の「札記」註 (3) はこれを裏書きされたものである。w. 7 : ŠNT = 'sāl “年” からは新しいセンテンスが始まるとみるべきであるから、この w. 6 : Sūrēn までが「これは何某である」という冒頭のステートメントにあたる。w. 7 : 'sāl “年” からはかの女の歿年の日付けが、祆曆（ゾロアストラ教曆）を主としながら、他の曆年をも併記して、記されている。漢文面ではもっぱら中国曆により咸通十五年甲午歲二月辛卯建廿八日丁巳申時と詳細である。辛卯建は（二月）二日にあたり、咸通15年2月28日丁巳は、19, III, 874 A. D. (ユリウス曆) にあたる（京大人文学研究所藪内清教授による）。では蕃文面であるが、ww. 8—10 は明らかに 200 ut 40 “二百と四十” を示していて、これを別の数値に読みかえることはできない。そしてこの240年の紀年はヤズドカルト曆である。

1. 3. w. 1 : Yazdkart は非常に磨損してはいるが、この再構は確実である。祆教徒はヤズドカルト三世即位の年、16, VI, 632 A. D. をサーサーン王朝滅亡後も、紀元としてながく保持した。いわゆる祆曆である。そうすると、蕃文は故ヤズドカルト（三

世)の240年ということになるが、問題はその後にくるもう一つの紀年である。w. 3—6の、筆者によれば 'sāl 260 i tanikān “唐朝の260年”と解読されうるものがそれである。260もほぼ確実である。一ひ “60”における最後のサイン一に何か損傷らしいものが見えるが、260にプラスされる数字ではありえない。そうすると、この260年とはどの紀元にもとづくものかが問題となるが、不幸なことにそれを決定すべきw. 6が甚しく不明瞭である。頭字 T はほぼ確実であり、T は initial としては t 音を示すのが常道であるから、この語は t……である。また ik と転写した記号 YK の K はかなりの部分を欠いているが、K であることは間違いない。そうすると残りの部分であるが、末部は Ālef と N 即ち 'n で、これもほぼ確実。最後に残るところは T と YK との間の部分である。筆者は「覚え書」においては t……とし唐朝をあらわすものと推定した。そういうところから唐の高祖の即位 618 A. D. から数えて 260 年となれば 878 A. D. となる。咸通15年=874 A. D. と比べてその差4年となり一致しない。これに対し夏博士は「札記」註(4)において回暦を提唱された。それによると漢文の日付は回暦260年5月26日(26, V, 260A. H.)であるから“まさに相符号する。当時波斯王室はすでに回教をもって国教となす、故に波斯祆教徒も祆教暦のほかに回暦をも兼用した。もし唐の高祖の即位を紀元とすれば、単にその差4年のみならず、当時これを紀元とする習慣がなかった”とある。この回暦紀元は筆者によっても一応考慮されたが、つぎの理由から採用に踏みきれなかったものである。理由というのは(1)回暦をとるなら当然 t'čyk'n=tāčikān “大食的”とよまねばならぬ。ところが問題の語の T と YK との間には、'(Ālef) と Č (Šāde) を同時に容れるスペースがない。Čらしい刻跡か傷跡か判別不明のものは、どうにかみとめることはできるが、そうすると '(Ālef) のスペースは全くなくなるのである。T の上方に、白く写っている傷跡がある。これが Ālef を追刻したものとすれば好都合であるが、どうもあやしい。(2)9世紀と言えばイラン祆教徒神学派の復興期で、パフラヴィー語を用いて最も多くの神学書が作成された時期であるが、なかでも異教論駁は最もはなばなしく展開された。『デーナカルト』やそれに依拠した『断疑論 (Škand-gumānik Vičār)』はイスラーム論駁に力をつくした。後者については拙稿「Pierre Jean de Menasce: Škand-gumānik Vičār」(『アジア・アフリカ文献調査報告第7冊—西アジア2』, 東京1964)を参照されたい。そうでなくてさえ回教徒の攻勢に支えきれず東方に難を避けた祆教徒が回暦を併用するなどのことは考えられないことである。このような理由から筆者は「覚え書」に引きつづき「試解」においても、問題の語詞を tāčikān “大食的”とよむわけ



マト月は祇曆の12月、スパンドルマト日は同5日であるから、墓誌蕃文にみえる日付は 5, XII, 240 A. Y. となる。あとで示すように、この日にマーシーシュが逝世したのである。ところでこの紀年ですぐに想起されるのは『マースシュチフルの書簡集 *Nāma-kihā i Mānuščihr*』である。現存しているのは書簡第 I, II, III の3通であるが、書簡第 I の第11章第12—13 節には注目すべき記載がある：

§ 12 : *Mānuščihr i Gušn-yamān nipišt 'rōc mäh Spandarmat 'andar ahrādih urvāzišnih ut dēn-stāyišnih ut yazdān-apastāmih ut spāsdārih i 'andar dātār i Ōhrmazd ut Amahraspandān hamāk yazdān mēnōkān <ut> yazdān gētikān*

§ 13 : *niṛāyišn 'ō hamōγ mäh 'kē-š ham 'rōc pat frač 'nām*

§ 12 : グシュン・ヤム (*Gušn-yam*) の子マースシュチフルが、幸いと歓喜、デー  
ン〈すなわち神の啓示、ゾロアストラ教〉に対する讃歎と神々に対する帰依、創造  
主オーフルマズドとアマフラスパンド諸神、メーノーク的〈不可見的〉神々ならび  
にゲーターク的〈可見的〉神々への感謝のうちに、日も月もスパンドルマトに〈こ  
の書簡を〉したためた。

§ 13 : 同じ名を日の名として先行させているこの月に栄光あれ。

§ 13 の方はやや自由訳を試みた。原文には「同じ名を日の名として先行させている、  
つり合いのとれた (*hamōγ*) この月に栄光あれ」とある。つまりスパンドルマト日・ス  
パンドルマト月は 慶祝すべき日だ、ということで、3月3日が雛祭り、5月5日が端  
午、9月9日が重陽の佳節といったようなものである。この書簡 I の日付けは、書簡 III  
が祇曆 250 年ホールダト月 (原文には *mäh Hōrdat i pērōžkar 200 ut 50 i Yazd-  
kart* “ヤズドカルト〈三世〉の 250 〈年〉、勝利者ホールダトの月” とある〔書簡 III,  
§ 21〕) にしたためられた点から推して、祇曆 249 年スパンドルマト月、スパンドルマ  
ト日 (5, XII, 249 A. Y.), すなわち 15, III, 881 A. D. となる。その上、書簡 I,  
11, § 13 (上出) によって、この日はめでたい日ということがわかる。—— こういう知  
見をもってわれわれはもう一度西安墓誌にたちかえてみると、マーシーシュが 26 才  
で逝世したのが祇曆 240 年の、ほかならぬ同じ *Spandarmat* 月 *Spandarmat* 日とい  
うことになるから、まことに意義深い日ということがわかる。墓誌にこのことを誌した  
のも故ありというべきか。ところで、このかの女の忌日 5 XII 240 A. Y. はかの書簡  
I の日付けたる 5 XII 249 A. Y. に先立つことわずか 9 年で、5 XII 249 A. Y. = 15  
III 881 A. D. から逆算するだけでも 5 XII 240 A. Y. = 17 III 872 A. D. が得られ

る、つまりかの女は 17 III 872 A. D. に逝世したことになる。ところが同じ忌日として漢文面の伝える咸通15年2月28日丁巳は 19 III 874 A. D. となるから、ここでも2年のズレが出てくる。いろいろな課題を提供しつつ 1.4 はこれで終わっている。

1. 5. まず ww. 1—2 それとも 1—3 とみるべきか、とにかく w. 1 から BYRH (= 'māh “月”)までがなかなかの難物である。筆者は「覚え書」では、提示された漢文面の略記も手伝って、この部分の合理的な解説にはついに到達することができなかった。ところが、こんどの合璧写真によって前回の疑惑からは脱することができた。すなわち、こんどは二月廿八日丁巳とあるのが何よりの助けとなった。さて子音転写で筆者は w. 1 を pnm-yn と写し、訓音転写では ĵan-ma-ĕn として“建卯の(月)”と訳しておいたが、とにかく w. 1 を二月と結びつけるのが筆者のねらいである。pnm はその外にも pwm, dĕnm, dĕwm, ĕnm, ĉwm などが可能であり、また n/w は r でもありうる。従って母音のうち方次第では、ずいぶん多種多様なよみ方が出てくる。しかし根本的には、二月と関係をもちうるものだけが拾い上げられる。二月は (1) 甲午歳の月建では丁卯である(藪内清:「スタイン敦煌文献中の曆書」〔『京都大学人文科学研究所東方学報』第三十五冊 p. 544 f.]) が、(2) 二月はまた異名としては建卯をも有する。字母 P を分解して dĉ とする(上記)なら、そしてこの dĉ (音は dĵ, dż でもありうる) で丁卯の丁の頭音をあらわしているとみるなら、pnm は dĵin-ma とよむほかはない。しかし dĵ は丁の頭音とはやや相違するし、またパフラヴィー語の orthography ではこのような dĉ (dĵ) を用いて一音をあらわすことは通例ではない。では (2) 建卯の場合はどうか。これにもやはり難点はある。(1) に関連して取扱ったところを援用すれば dĵan-ma とよむことができるが、dĉ (dĵ) で一音をあらわすことは通例でない。では、字母 P が時として字母 Č と交代することがある事実に注目して pnm の P にそれを援用するほかはないが、そうすると Č は ĉ/ĵ/ž/z などを示しうるので、pnm は ĵan-ma とよむことができるし、建卯(jiàn-mǎo)には極めて近くなる。そこで筆者はこの読み方をとることとしたい。ところで難点というのはこうである。1.3 の結語 pyrwoĉkr (pĕrōžkar) では Č (/ž/) は明らかに字母 Č 個有の形を保持している。他とつづけ書きにされないときは、これが常規である。従って pnm “ĵan-ma”においても頭字は本来の Č であるのが本筋であって、P であるのはおかしい——ということである。そうした疑点はそのままとし、さらに次にうつってみると、この pnm すなわち ĵan-ma “建卯”と BYRH='māh “月”との間に、彫りは

浅いが、鐫刻がみえる。yn か dw かであろう。yn は *en* とよんで形容詞的接尾辞とみることができるし、dw は *dō* とよんで “2, two” とみなすことができる。そうすると、*jan-ma-en* ‘*māh* “建卯の月” か、*jan-ma dō* ‘*māh* “建卯二月” となる。われわれは表現過剰な後者をすてて前者をとりたい。こうして一応の検討を終えてみたが、結局この中国的表現では月分だけが示されて、日分の表示は見出せないことになる。つまり蕃文には漢文の廿八日丁巳に相当する表示がないのである。どうしても日分を求めようとすれば *pnm* を *aβdom* “the last, 末 (日)” とよむしかない。1.4 の最後に日分を鐫刻していた形跡は全くないからである。つまり *aβdom dō* ‘*māh* “二月末” である。しかし *aβdom* は  $\alpha\beta\omega$  と書かれるので *pnm* すなわち  $\alpha\iota\omega$  とは違いすぎる。筆者は 1.3, w. 6 : *tnyk’n* (*tanikān*) “唐朝的” に見合う月分としてこの *pnm* をこれまで凝視しつづけてきた。ところが、この *tanikān* が *tāčikān* “大食的” で回暦を示す (筆者は賛しえないが) ものとすれば、この *pnm* はその月分の名称でありうるが、*pnmyn* からは何も引き出すことができない。咸通15年2月28日が回暦260年5月26日にあたるところから、この *pnmyn* ‘*māh* に “五月” をよみとろうとして仮りに *panjom* ‘*māh* “第五月” を要請しても、*panjom* は  $\alpha\iota\zeta\omega$  であるから、*yn* が  $\check{C}$  の誤記であると共に位置まで誤ったものと見做さなければならなくなる。これは全く可能性がない。これでかの女の忌日の問題は一応おわることになる。そして蕃文はかの女が *pat 26 vitirān* ‘*būt* “廿六で逝世者となった” と謳っている。「覚え書」では *vitart* /// “逝世した///” としていたものが「試解」では更にはっきりしてきて *vitirān* ‘*būt* “逝世者となった” と解説された。—— 以上で漢文面に対応する蕃文面がおわるわけで、以下すなわち w. 7 : ‘*ut-aš* “そしてかの女の” 以降は漢文面には全く見出せない部分である。w. 8 : *g’s=gāh* “坐所” はややイビツなところがあるが確実。w. 9 : *LWTH=’apāk* “with” は極めて明白。結語 w. 10 : ‘*whrmzd* は MMのごとく M が二つ書かれ、第一 M の上部が削られているように見えるほかに、MM の上方に ‘(Ālef) のような鐫刻(?) がみえる。この ‘らしいものが確実ならこれが *zd* と分解さるべきもので、2個の MM のうち1個は当然不用である。よって p. 19 に示したテキストでは正当な形で示し、その下に下線を施したし、子音転写や訓音転写でもこれに準じた。こうした崩れはあるが、この w. 10 がオーフルマズド (Öhrmazd) であることは疑う余地がない。祇教徒の仰ぐ最高神格である。

1. 6. 全体としては彫りこみの浅いところや欠損しているところがあって、「覚え書」

では最も難航した部分である。紙数の関係もあるのでここではそれに触れないが、「試解」では w. 2 : Amāsraspandān が読み取られたので、これを契機として解読は飛躍的に進展した。Amāsraspandān とは上掲書簡I, 11, 12にみえる Amahraspandān と同じもので、末辞 ān は複数の接尾辞。主神 Ōhrmazd に陪接する6柱の Archangel で、上出した Spandarmat や Hōrdat もその一つで、これが月名や日名になっているのである。ただし、蕃文の Amāsraspandān では、M につづく記号は一見 yww (または dnn) であるが、これは  を使って ā を写そうとしたものとみたい。また末音 -dān の dā は字母 S に見えるし、n は全くよみとれないものを再構したものである。これで ww. 1-2 は ut Amāsraspandān と解することができた。つぎは w. 3 であるが、あとまわしにして、w. 4 (とみられる) garōdmān をききに取扱いたい。grwtm'n と解釈的写音法をとったが、r は L 字 (Lāmed) を用いていてその頭部が明瞭にうかがわれる。wt も確実であるが、そのあとの m' は欠損して写真では白くうつっている。しかしその白い部分は m' を容れるにふさわしいスペースを具えている。これらに対してやや気がかりなのは頭字 G である。相当右にはなれた個所から大きく彎曲して L につづいていたものと思われる。G の頭部と思われるものがはっきり見えるので、この点ほぼ確実である。この西安墓誌では語頭の G (=Y) や S などに、この特色が出ている。従って G の頭部と思われるものと L との間がかなり隔っていても、その間に '(Ālef) の介在を予想するのは合理的でない。garōdmān は g'r …… とは書かずに gr …… と書くのが普通である。ガロードマーンとはオーフルマズド神の止住する至上天、それゆえに garōdmān i pahlom az'ān “最勝の境涯たるガロードマーン” といわれるのである。iḏāfet の i は W (=ut) に近いほど長くひかれているが、pahlom の P と比べてみてやや短いので、やはり y=i とみるべきである。もっとも、W (=ut) であっても“ガロードマーンと最勝界”となって、意味上相容れないほどのズレは出て来ない。神学的にはガロードマーン天を Pahlom Az'ān 天の下に位置させるケースもあるが、両者を同一視するケースもある。ところで、この garōdmān と Amāsraspandān との間はどうなっているのか。これがききに留保しておいた w. 3 である。写真は  =BYN='andar “in, within, among” の一部をうかがわせるようにも思われる。この場合にもおそらく右から左へ大きな彎曲を画いていたであろうし、この第1彎曲の外側を今度は第2彎曲が左から右へトレースされるのであるが、この第2彎曲がその跡を、岩面のキズとまぎらわしいなかにも、どうやら読みとらせている。しかしこうは言っても、全体としてはこの w. 3 は跡をとどめて

いないと言ってもよほど崩壊し去っている。ただし文脈からは、ここはどうしても 'andar でなければなるまい。pat やその他の前置詞ではダメである。そうした事情から筆者は、この語だけは全く筆者が補ったという建前で、〔 〕にかこんで示すこととしたのである。つぎは w. 8 : YHWWNt であるが、写真を見ると YHWWN のあとが𐎠 ('yn) のような形を示している。筆者のテキスト (p. 19) ではこれを Tāw (𐎠) としてかかげ、子音転写では YHWWNt, 訓音転写では 'būt とし、訳文もこれに従っておいた。そうすると 1. 5, w. 7 : 'ut-aš 以下この 'būt までは

'ut-aš gāh 'apāk Ōhrmazd ut Amāsraspandān 'andar garōdmān i pah-lom az'ān 'būt

そしてかの女の坐所は〈今や〉最勝界たるガロードマーンにおいてオーフルマズドやアマスラスパンド諸神といっしょになることとなった。

または

そしてかの女の坐所は〈今や〉オーフルマズドやアマスラスパンド諸神とともに、最勝界たるガロードマーンのなかにあることとなった。

となる。しかし、末辞が曖昧な問題の語 (YHWWN…) がもし接続法の第3人称単数 'bavāt か、願望法 'bavēndēh を意味しているなら、訳文も上記二訳に応じて、それぞれ“そしてかの女の坐所が……諸神といっしょになるように”、または“そしてかの女の坐所が……ガロードマーンのなかにあるように”となる。接続、願望両法とも、ほぼ同義に解してよい。この YHWWN… がこのように接続法や願望法であっても、末語 ŠLM='drōt “平安” をその主語とみて“平安あれ”と解することはできない。パフラヴィー語法としては、そのような場合には 'drōt 'bavāt の如く主語が先行するからである。'drōt は単独で“〈かの女に〉平安〈あれ〉”という意を示すものである。

### III 西安墓誌と周辺

西安墓誌蕃文 (中期ペルシア語) のシンタックスや文法形態、それにその書体などにつき二、三摘記してみたい。それについてあらかじめ知りたいのは、墓誌に名をつらねる人物がいつ入唐したかである。夏博士の見解は「札記」註 (3) として上に紹介したとおりである。(a)『資治通鑑』上掲個所によると、貞元3年 (787) には長安の胡客中には在歴すでに40年にもなっているものがあり、帰路を絶たれていたことが記されている。夏博士の言のごとく、その後の新来者を考えるべきでないとするならば、かれらは

咸通15年(874)より約1世紀または1世紀以上前に入唐した胡客の後裔ということになる。こういう考え方に對し、(b)この蕃文墓誌によると咸通15年にさほど先立つとも思われぬ時期に、胡客はなお神策軍に入っていたと考えられるから、貞元3年以後の入唐でしかも機に応じて神策軍に編入されたことも考えられないことはない。ホラーサーンからソグド地域を経て中国につらなるルートは祇教徒が多数居住していたことが立証されているので、スーレーン家の一員がこれに乗じて遅れて入唐したことも考えられるのである。そうすると、(b)の場合では西安墓誌作成の時期(874)をそのまま考察の対象として差支えないこととなる。

874 A. D. といえ、すでに新期ペルシア語の時代である。新期ペルシア語最古の文献は Tang i Azāo で発見された刻文で、セレウコス紀元1064年(752—53 A. D.)の紀年をもっているものとされている。それから、詩文の方では、もっとも研究者のなかには疑問視するものもあるが、メルヴの詩人 'Abbās なるものがカリフ al-Ma'mūn をたたえて 809 A. D. に書いた詩の残簡が最古のものとされている。しかしこの墓誌蕃文に関するかぎり、シンタクスにおいても、文法形態においても、語彙においても首尾一貫して中期ペルシア語であって、新期ペルシア語を示す要素はなにもない。このことは、(a)の場合の如く8世紀の入唐である上に閉鎖社会として中期語層をそのまま保持したためと解することもできるが、(b)の場合をとって9世紀入唐を認めても少しも差支えはない。9世紀は、さきにも記したように、中期ペルシア語いわゆるパフラヴィー語をもって最も多くの祇教書が作成された時期であった——こういう事情をもそのまま反映したものとも考えることもできるし、日常語が中期語層をはなれても、刻文には宗教的にもなじみ深い中期語を用いるということもある。いずれにせよ、これらの著作に用いられている字体をとくに文籀パフラヴィー(Bookpahlavī)書体というが、西安墓誌は全くそれと同じものである。もちろん、この書体はパフラヴィー走行体(Pahlavī cursive)とよばれるものの後期のものであるから、前期のものを代表する旧約聖書詩篇のパフラヴィー語訳残簡(吐魯蕃の北、Bulayīq で発見されたもの)のそれとはすでにならぬ開きがある。それでも墓誌書体の細部について二、三指摘すべきものはある。例えば字母 Ālef が  と書かれずに  とされているものがあるとか、字母 Tāw が右からつづけ書きにされるべきときにも殆んど離されたままであるとか、である。これらは一見、古体を再現しているように見えるし、そこからいろいろの推測的見解も出て来よう。しかし碑文の鐫刻は筆写とは趣きが異なるので、文字学的所見はあまり拠りどころとはならない。後述する Lādakān の墓塔における西暦11世紀初頭

の刻文（パフラヴィー走行体）にも  $\bar{A}lef$  が  $\text{𐬀}$  として見出せるのである。古いところでは Lamghān の Pūl i Daruntah で発見されたアラム語碑の断片が、Taxila 出土の阿育王碑文（アラム語）よりも Reichsaramäisch（ハカーマニシュ王朝時代に広く使用されていたアラム語）の書体にいっそう近いものを有しているとして、その年代的考察まで試みられていたのに、のちになってそうでないことが確認されたことなどもそのよい一例である。だから、西安墓誌でも書体の細部は重視すべきでないと考え、サーサーン朝末 7 世紀に成立し、そのまま祇教徒によって固定保守され 8～9 世紀にもそのまま使用されていたと見做される Bookpahlavī 書体の一範例を、ここに認めるべきである。祇教徒が用いてもって幾多の著作を述作した書体である。しかも今日残存する斯体最古の写本といっても 1323 A. D. を出ないのであるから、西安墓誌がいかに貴重な存在であるかがわかるであろう。そして両者を比較しても書体の相違を認めることができないことも特筆すべきことである。

また広く Pahlavī cursive 後期の一環として捉えてみると、この墓誌の文字学的地位がいっそうはっきりする。走行体後期のもので紀年のある最古のものは、これまでのところ、エジプトで発見された一パピルス文書であった (619 A. D.)。そのほか、銀器、貨幣、印章、護符（古いものは 6 世紀）などにも走行体後期のもはかなり発見されているが、貨幣は別として、そのほかのものは、オストラカ（陶文）まで加えて検討しても、そのうちのどれだけがイスラーム以前であり、どれだけが初期イスラーム時代に入るかは、なかなか決定しがたい問題である。文字だけでは決定できないからで、走行体はイランではイスラーム時代に入っても長く使用されており、しかも祇教徒に限られたものではなかったのである。たとえばブーイェ (Būyah) 王朝の 'Aḏodo 'd-Daulah (983 A. D. 歿) が 969/70 A. D. に鑄造した一金貨には走行体で表面には

dgr YHW š'pn'hwsrwdy  
 dēr 'bavād šā(h) Panā(h)-Nosrau  
 Panāh-Nosrau 王永遠なれ

とあり、裏面には

GDH-'pzwt MLK'n MLK'  
 'z'arr-aβzūd 'šāhān 'šāh  
 榮光を増大させたる、諸王の王

とあるし、11世紀の初めでもなお Lādakān, Laḡim, Resget などイラン北部山地における諸小王の墓塔にもやはり走行体をもってしたパフラヴィー語刻文が見えるのであ

る (E. Herzfeld: *Archaeologische Mitteilungen aus Iran*, Bd. IV [Berlin 1932], S. 140 ff.)。イラン地域のもはこのような状況であるが、イラン以外としてはインドにも記すべきものはある。しかしそれらは直接の関係も少ない上に、イランで発見されたこれらの資料のみでこの小論には十分であるから、今はインドに論及することはさしひかえたい。参考文献としては W. B. Henning: *Mitteliranisch* (『*Handbuch der Orientalistik*』 I, IV, 1) Leiden-Köln 1958, S. 43 ff. がある。

このように概観してみると、西安墓誌の地位をさらに正確に位置づけることができる。すなわち (1) 紀年のあるパフラヴィー走行体後期のものとしては、年次的には、前述したパピルス文書につぐ資料であり、また (2) イランとインドを除く以東の地域では、走行体前後期を通じての唯一の現地資料である。けだし、詩篇訳残簡は書体も古く(走行体前期。5世紀の成立)、筆写年代も8世紀に近い(7世紀よりも)とされているので、西安墓誌も一步を譲るところがあるが、しかしこの残簡はその出土地 Bulayiq においてイラン人キリスト教徒の手によって作成されたものではないからである。その上、さきにも記したように、(3) Bookpahlavī 書体としては年次明瞭な最古の資料ということになる。

すでに機会を求めて上述したように、墓誌の二人物はイランからの避難者である。回教徒の攻勢におされてホラーサーンからマーワラー・アン・ナフルを経て東方に逃れ、長安(西安)に来た胡客である。咸通15年(874 A. D.)に娘が26才で逝世し、しかもかの女に父(であると共に夫でもあった人)が追悼の墓誌を記すか、またはかれの遺言(?)によってだれかが記したとするならば、かの女もその父なる人と苦難のなかを唐朝に避難して来たもののように思われる。或いはもし貞元3年(787 A. D.)に神策軍に入った胡客の後裔とすれば、父なる人の地位からこの追悼墓誌が作成されたのであろうか。その辺の消息は推定の域を出ないが、この西安墓誌蕃文は広く東西交渉史の重要な一コマを解明するものとして高く評価される。中国にはすでに早くから祆教の事情が紹介されていたばかりでなく、祆祠や祆教徒のいたことを少なからぬ文献が示唆していた。この蕃文墓誌は、そうした事情をイラン人祆教徒自身の手で、かれらの言語で、かれらの文字で裏書きした史料としてその価値はまことに不朽。われわれは東西交渉史料としてのその地位を上(1)―(3)に加えて(4)とすることができる。

稿を終えるにあたって筆者は、拙稿発表に許諾を与えられた夏博士、墓誌紹介の労をとられた樋口助教授、ならびに助言をいただいた藪内教授に深甚な謝意を表したい。

(筆者は「西南アジア研究」編集部員)